

Im Challenger チャレンジャー

明日に向かって今を生きる

音楽でコミュニケーション！
気持ちに染みこむ音色を奏でたい。

音楽療法士・バイオリニスト
濱島 秀行さん

音楽療法とは具体的にどんな事をなさるのですか？

◆♪一緒に歌をうたったり楽器を演奏したりして、音楽をひとつのコミュニケーションの手段として使います。たとえば、僕が勤務する老人医療施設には大正琴やハーモニカとか楽器のできる方が結構いらっしゃるんです。そういう方に演奏をしていただき、皆と一緒に歌をうたったりします。あと、沖縄の民族楽器でエイサーという舞踊のときに使うパーラックという小ぶりの太鼓を沖縄出身の方がすごく上手に叩かれます。やっぱり皆さんいきいきされますねえ。他には、ミュージックベル（ハンドベルの小さいもの）で和音を楽しんだり、貝殻を使ってシャラシャラって。名前はないので、「貝殻じゃらじゃら」なんて呼んだりしてます。空き缶で作ったドラムも好評でした。皆でそういったものを作ったりして音楽を楽しみます。

音楽は直接心に働きかけるので、言葉は必要としないんですよ。だからこう、一緒に楽器を演奏していても、何も説明しなくてもピタッとハーモニーがあったりとか、きれいな音楽ができあがったりするんですね。自分自身、音楽がすごく好きなので、好きなことがいかにせるこの仕事をしていて幸せだなんて思いますね。

介護の現場で音楽療法をと思われたのは何かキッカケがあったのですか？

◆♪僕が小学生の頃、アルツハイマー型の認知症になった祖父がある時、僕に「あんたどこの子かね？」と。その一言がショックで、そのとき僕はすごく怒ったみたいなんですよ。

祖父も祖母も音楽が大好きで、僕が認知症という病気に対してもうちょっと理解ができていて、音楽療法というものを知っていたら、もっと接し方が違っていたん



7月30日ふれあい会館にて 無料コンサート

じゃないかって思いました。

僕が高校生のときに母が特別養護老人ホームで音楽のボランティアをやっていたんですよ。で、僕もたまに手伝ってバイオリンで、演奏させてもらっていました。そのころに岐阜県音楽療法研究所のことがメディアで特集されていたのを見て、“ああ、音楽をこんなふうにかすことができるんだ”と興味を持ち、その道を歩むことになりました。

お年寄りの方の反応はどうですか？

◆♪認知症が重度になるとなかなか意志の疎通ができなかったり、会話のつじつまがあわなくな

ったりします。そういう方が昔覚えた唱歌とか童謡をバイオリンで弾いたときに、自然に歌われたのにはびっくりしました。やっぱり、表情が変わりますし、涙ぐまれる場面もありましたので、そんなときはすごくインパクトを受けました。あと、歌の好きな方は昔の唱歌や流行歌を演奏するとすごく喜ばれます。「懐かしいね」「昔この歌よく歌ったわ」と会話に出てきます。それから、お昼休みなんかにはちょっと時間を持て余している方がいれば、別室で歌でもうたいましょうか、とお誘いしバイオリンやオルガンに合わせてうたったりします。たとえば、“二人は若い”“青い山脈”“りんごの歌”や“旅の夜風”“憧れのハワイ航路”とか…。20代で昭和の流行歌をこれだけ知っている人も少ないんじゃないかな（笑）。

医療の現場にも行かれるそうですが？

◆♪学生時代からの継続的な活動で、月1回、病院の緩和ケア病棟、末期癌の患者さんの病棟で演奏活

動を行っています。

患者さんがお茶を楽しまれる喫茶タイムという時間に、ちょっとしたコンサートを開いたり、希望されれば直接お部屋まで伺って患者さんのすぐそばで生の演奏をお届けするという活動をしています。

時には患者さんが涙を流される姿にドキッとさせられたり、自分もちょっと涙ぐんだり。患者さんやご家族が流される涙にはいつも考えさせられますね。



■はまじまひでゆき（音楽療法士）…音楽一家に生まれ、5歳よりバイオリンを始める。14歳で「子供のための音楽コンクール」に出場、銅賞受賞。大学時代、室内楽団「カペラアカデミカ」（静岡県浜松市）に所属。現在はホスピスや、高齢者福祉施設で演奏を行うなど積極的に活動中。音色に定評がある異色バイオリニスト。

（岐阜市在住）

大学時代に印象的なことがありました。緩和ケア病棟でご夫婦でクラシック音楽が大好きな方のお部屋に伺ったときに患者さん（ご主人）が、昔奥様と行かれたコンサートのことを思い出され、そのことを語ってみえました。奥様も涙を流しておられました。その光景は、とても印象に残っていますね。1ヶ月後に伺ったときにはご主人が涙を流し、手を合わせて聴いておられました。感謝の気持ちを表しておられたんでしょうか。その姿を見て僕も胸が熱くなりました。

5才からバイオリンを始められたそうですね。今までにバイオリンを辞めたいと思ったことは？

◆♪ありますねえ。一番初めに習った曲がなかなか弾けなくて投げ出そうかな、と。そのとき親も先生も必死だったみたいです。で、何とか僕もその気持ちにこたえられたというか。その後も、山あり谷ありでしたよ。

実は僕、昔は練習嫌いだったんですよ（笑）。気分が乗らないときもあるし、そんな時にやれやれ言われると嫌になって。でも、自分が怒っているときは、バイオリンの音にもそれが出してしまうんです。隣の部屋で聴いていた母に「あなた今怒りながら弾いていたでしょ」って言われたときはちょっとドキッとしましたね。

こっちが楽しい気持ちでやっている相手の方もつてくれますね。演奏しているときに自分の感情は相手に伝わりますので。だから僕は自分が音楽をやるときはまず自分が楽しもう、という気持ちでやっています。

今はバイオリンにだいぶ助けられています。自分が落ち込んでいるときとか、イヤなことがあったときにバイオリンを演奏するとそれでストレス発散になったり、また頑張ろうって気持ちになったりとか、そういった部分でいろいろ助けられていますね。

音楽療法士になられて自分の中で音楽に対する変化ありますか？

◆♪そうですね。最近になってバイオリンを弾くということがより好きになりましたね。いろんな方に聞いていただく中で、自分ももっと頑張ろうという気持ちになったり、そういった変化

音楽療法

・日本音楽療法学会の定義

音楽療法とは、「音楽のもつ生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」

・岐阜県音楽療法研究所の定義

「音楽療法とは、おんがくりようほう（音楽利用法）」
音楽療法は、目的を持った音楽の利用法の一部であり、相手の○○の向上や改善という目的をもって音楽の力（機能）を活用していくものと考えられる。ただし、音楽の利用すべてを音楽療法とは言わない。例えば、軍歌や、コマーシャルソングは音楽の利用であるが、音楽療法ではない。

はありました。2年間いろんなことをやってきたんですけど、まだまだ力不足です。でも、やっぱり音楽の時間を一緒に楽しむというのが一番大切な、と思います。

バイオリニストとしての今後の活動は？

◆♪7月から、岐阜市内の豆茶房というカフェで第4土曜の夜8時頃からレギュラーライブをやらせていただいています。

今後も、音楽療法士とは別にオフの日にはバイオリニストとして活動していきます。二足の草鞋で忙しいけれど、好きなことをやらせていただいているので楽しいですね。

僕はどちらかといえば外で演奏するのが好きなので、たとえば、伊吹山で山頂ライブとか、薄墨桜の木の下とか、そういう素晴らしいロケーションを楽しみながら音楽も楽しめるようなライブをいつかやってみたいです。

また、7月に結成した「wing」というインストユニット（フルート/上地弘恵、ピアノ/松村慶子、バイオリン/濱島秀行）のメンバーとしても今後活動を行っていきます。応援よろしくをお願いします♪

現在、濱島さんは岐阜市内にある認知症の方のデイケア施設で常勤の音楽療法士として勤務。デイケアでは音楽療法だけでなく、回想法、学習療法、芸術療法などを取り入れて総合的な脳リハビリテーションを行っている。音楽療法のセッションは週1回とか限られた回数になりがちであるが、彼は毎日の生活の中で音楽を取り入れていきたいと語る。医療の現場だけでなく、あらゆる人にバイオリンを聴いてもらいたいと語る彼の横顔は充実感にあふれていた。